

機関番号：32675

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20530483

研究課題名 (和文) 「戦後沖縄文学」の社会学：文化表象論と文学制度論からの接近

研究課題名 (英文) Sociology of the literature in Postwar Okinawa :
Approach to its representations and institutions

研究代表者

鈴木 智之 (SUZUKI TOMOYUKI)

法政大学・社会学部・教授

研究者番号：80235978

研究成果の概要 (和文)：本研究では、戦後沖縄における「文学表象」と「文化的実践の場」の構造に関する社会学的分析を行うことを課題としてきた。沖縄において「文学」は、政治的状況の強い規定力と、文化的・言語的な固有性に影響されながら、「弱い自律性」を特徴とする文化的実践の場を形成している。地域に固有の制度的布置の中で、文学は、この地域の歴史現実を表象する重要な媒体でありつづけている。本研究では、戦後沖縄を代表する何人かの作家たちについて、社会的状況と文学的実践を結ぶ、その多面的な媒介の論理を明らかにすることができた。

研究成果の概要 (英文)：From a sociological point of view, we made some analysis on the representations constructed by literary texts and the structure of “field” of cultural productions in Postwar Okinawa. Under the influences of the political situations and the particularity of the culture and language, the literary practices in Okinawa construct a “field” characterized by its “weak autonomy”. In this institutional setting, the literature has been always one of the important media which represent the historical reality of the region. We made investigations on some important authors to make clear the multidimensional mediations between the social situations and the literary practices.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：文学、社会学、戦争、記憶、制度、言語、沖縄、表象

1. 研究開始当初の背景

(1) 文学社会学の研究史上の文脈

表象論の視点に立つ社会学的文学研究は、マルクス主義的な「土台-上部構造」の図式

にもとづく知識社会学的な研究として発展してきた。しかし、構造主義的思考の台頭とともに、「表象」の自律性を前提とした記号論的な視点が優位に立ち、象徴システムの内

在的分析へと力点を移すことになった。しかし、M. フーコーの「考古学」的な発想などを転機として、記号の意味作用の可能性と限界を規定する歴史的な条件が主題化されるようになり、「言説」の内在的な記述を通じて、その外部にある構造を浮かび上がらせようとする研究へと、さらに力点は移動しつつある。近年は、オリエンタリズム批判 (E. サイド) やポストコロニアル批評の影響を組み込みながら、「カルチュラル・スタディーズ」が、この流れを加速させ、現実の言説的な構成とその政治的な効果との関係を明確化しようとしている。

他方、文学的事実への制度論的アプローチは、H. ベッカーによる「アートワールド」の理論、P. ブルデューの「文学場」の理論、あるいはJ. デュボアらによる「文学制度」論などを起点として、この二十年ほどの間に、文学・芸術研究と文化社会学の交差領域に相当の蓄積を生んできた。これに通底する考え方は、「文学」や「芸術」を産出し、流通させ、消費する過程が、社会システムの中に固有の一領域を占め、相対的に自律的な実践の空間を構成しているという点にある。この自律的な実践の論理の社会的構成を主題化し、「文学」的、「芸術」的行為の具体的・実質的な条件を、記述・分析していくところに、「制度論」の視角がある。

私たちはこれまで、L. ゴルドマンを起点として「表象」と「歴史的な文脈」との結びつきを記述しようとする「社会学」の方法論を検討し、同時にその死角を補うものとして、P. ブルデューとその研究協力者たちの「芸術場」「文学場」の理論の吸収と展開を試みてきた。その流れの中で、「沖縄文学研究会」を組織し、戦後沖縄の文学に関する共同研究に携わってきた。

理論的な水準では、以下のような3つの課題が重要である。

- ①文学制度・文学場の境界と政治・文化的な領域との関係をいかにとらえるか。
- ②制度的な境界性・周辺性と、言語的な境界性・複数性の関係をいかにとらえるか。
- ③文学場の制度的な規定力の分析を、文学表象あるいはテキストの分析と接合する視点をいかに獲得するか。

(2) 「沖縄文学」をめぐる状況

「沖縄」における「文学実践」は、この島嶼地域の地理的・政治的・歴史的な条件に規定されて、独自の社会的文脈の中で展開されてきた。「日本社会」に対する「同化」と「異化」の狭間での揺れ動き、「日本国家」による「併

合」とここからの「自立」を志向する動きとの拮抗関係、「戦後」の米軍統治下における土地の接収や「復帰後」にまで継続する基地の存在など、「沖縄」において発せられる諸言説は、常に政治的な緊張関係の中でその意味を問われるものであった。その中で、「文学」と「政治」の関係を明らかにすることが、「沖縄文学」の研究において重要な課題であることは言うまでもない。他方、「沖縄」の文学は、固有の基層文化や生活文化（あるいは文化的記憶）との関連においてその独自性を問われてきた。その伝統的な世界観が文学世界をいかに規定し、そこに再現されているのか。蓄積された文化的記憶が、文学生産においていかに使用され、変形され、「資源」として機能しているのか。これを明らかにすることがもう一つの重要な課題になる。

その一方で、「文学実践（生産・流通・消費）」は、固有の制度的環境と、今日の社会言語的状況に制約された形でしか成立しえない。しかし「沖縄文学」をめぐる制度的な条件（制度的周辺性）や社会言語的境界性・多層性との関連で文学作品を論じていく研究は、これまでのところ十分な蓄積を見ていない。基層文化と政治的規定力を、制度的媒介、社会言語的状況の媒介と重ね合わせながら、文学実践の主体（書き手・読み手）の置かれている場の記述を進めることが求められている。

2. 研究の目的

上述のような状況認識と課題認識の下、本研究では、「文化表象論」と「文学制度論」の視点を総合し、「文学事象の社会学」を構想しつつ、「戦後沖縄」における文学実践と作品（テキスト）の分析を進めていくことを課題とした。

具体的な検討課題は、以下の点に求められる。

(1) 文学実践をとりまく沖縄に固有の制度的状況の明確化

①「媒体（メディア）」の編成のあり方：戦後の沖縄の文学を支えてきた媒体は、『沖縄タイムス』と『琉球新報』をはじめとする「新聞」と、『新沖縄文学』や『青い海』に代表される雑誌（しかし実質的には無数の同人誌によって構成される）、そして自費出版を中心とする「書籍」である。それは、高い商業性をもつ広域的な媒体が成立してこなかったということでもある。このことが、沖縄の文学の動向を強く規定すると同時に、社会的な機能を方向づけてきた。これらの媒体相互の関係を歴史的に記述し直し、文学実践の制度的媒介項としてのメディアの役割を明確にすることが一つの課題である。

②制度的正統化の審級としての「文学賞」の位置：沖縄における文学的聖別化の装置は、小説においては「琉球新報短編文学賞」、「新沖縄文学賞」、詩においては「山之口貌賞」という、いずれも新聞社の制定する「賞」として構成されてきた。これらの「文学賞」が、文学の生産と受容をどのように方向づけ、また県外（特に「中央」）の文学的媒体や組織とどのように接合されてきたのか。この明確な記述を通じて、文学制度の機能を明らかにすることが第二の課題である。

(2) 政治的状況・文化的固有性と制度的規定力の相互関係の明確化

個別の作家や作家集団、もしくは作品に即して、政治的状況の規定力や文化的文脈の固有性が、上述のような制度的諸条件に媒介されて、どのような「文学表象」の産出につながっているのかを明らかにすること。

①「戦後」の沖縄文学における「沖縄戦の記憶」の表象に焦点をあて、その変遷を、文学場の構造に照らして記述すること。とりわけ、近年「政治的な係争」の焦点となっている「集団自決」の記憶の語られ方を、文学テキストと社会的諸言説との相互作用の中で検討する。

②沖縄文学における「モダニズム」の運動に照準化し、その文化＝政治的な意義を問うとともに、制度論的な文脈の中に位置づけること。特に、清田政信を中心とする『琉大文学』の第三世代に焦点を合わせ、「詩的言語」の自立を図ろうとする運動が、復帰前後の沖縄の状況とどのように関わるものであったのか。また、文学者の共同体の内部では高い評価を受けた彼らの実践が、文学賞をはじめとする制度的布置の中でどのように位置づけられていったのかを問う。

(3) 社会言語的状況と文学生産

沖縄の言語状況に対する固有の応答の形式として、文学実践の位置づけを試みる。具体的には、大城立裕から崎山多美にいたる「小説」のテキスト、上原紀善や中里友豪などによる「詩」のテキストにおいて、「沖縄語（うちなーぐち）」の音韻がどのように「作品化」されてきたのか。その試みに対する「文学場」の対応はどうであったのか。そして、これらの試みを呼び起こす政治的な契機は何であったのかを問う。

3. 研究の方法

(1) 資料収集

①沖縄県内外の図書館・資料館に所蔵される文献資料、②沖縄タイムス社・琉球新報社に保管されるおける新聞記事・資料（データベ

ース）、③雑誌・同人誌刊行機関・団体における刊行物（特にバックナンバー）、④沖縄県内の古書店に流通する書籍・資料の中から、戦後沖縄文学に関する基本文献を収集する。

(2) 文学実践者へのインタビュー

戦後沖縄文学にかかわる実践者（作家・編集者・関連機関の職員）へのインタビューを通じて、文学実践の場の状況とそれぞれの実践者の行為・戦略を明らかにする。

(3) テキストの分析

①入手した文献資料から、文学作品・テキストをピックアップし、表象論的な視点からの分析を行う。②文学制度論の視点に立って、文学実践の場の構造の中で、テキストの意味作用と、個々の実践者の戦略の解析を行う。

具体的には、原則として毎月1回、東京都内（明治学院大学、法政大学、東洋英和女学院大学）において研究会を開催し、テキストの分析作業の報告とこれをめぐる討議を行ってきた。

毎年、夏季期間中に、1週間前後沖縄を訪れ、関係者へのインタビューと資料収集を行った。

また、2010年度には、東京で2度のシンポジウムを開催し、文学・文化活動の実践者と関連領域の人々を交えた討議を行った。

4. 研究成果

(1) 沖縄での文学実践を取り巻く「制度的状況」については、①雑誌『新沖縄文学』（沖縄タイムス社）と「新沖縄文学賞」が果たした役割についての分析を継続するとともに、②文芸同人誌の刊行・活動状況に関する全体的な見取り図を描く作業を行い、他方で、③「山之口貌賞」（琉球新報社）の受賞作の作品分析・選評分析の作業を行ってきた。これらの成果については、現在報告論文の準備中である。理論上の予備的考察として、鈴木（2011）を刊行した。

(2) 政治的状況・文化的固有性と文学制度の相互関係の解明については、①沖縄戦の記憶と文学を主題として、鈴木（2008）、武山（2010）ほかの論考を公表した。②社会言語的状況と文学の関係については、鈴木（2010）、松下（2010、2011）、ヤング（2010）に論考を提示した。沖縄のモダニズムと政治、特に清田政信の詩をめぐって、松島が論考を準備中である。

③文化的状況と文学の関係に関しては、与那覇（2009）、加藤（2009）ほかの論考を示した。沖縄の基層文化と表象に関しては、塩月（2008、2010、2011）を刊行した。

(3) 沖縄文学とその周辺の「メディア表象」「現代文学」と関連を問うことを目的として、2010年度に2回のシンポジウムを開催した。

①現代文学と言語的他者性－多和田葉子氏

を迎えて(2010年6月5日(土) 東洋英和女学院大学六本木校)

②沖繩・映像表現の新潮流ー『アコークロー』から『琉神マブヤー』へ(2010年11月27日(土) 東洋英和女学院大学六本木校)

第1回目のシンポジウムは、「文学における言語的越境」を主題とし、言葉と言葉の「狭間」を語り続けている作家・多和田葉子氏を招き、その文学的創造の方法を論じるとともに、沖繩において「日本語」と「シマことば」の境界を越え出ようとすることの意義を、主に崎山多美氏の作品に焦点をおいて検討した。

第2回目のシンポジウムでは、「映像」へと視線を広げ、今沖繩において、沖繩を撮るという営みが、どのような状況の中で展開されているのかを論じた。映画『アコークロー』、テレビシリーズ『琉神マブヤー』、『オキナワノコワイハナシ』などの制作・監督をてがける、山田優樹氏・岸本司氏・川端匠志氏を招き、その制作の意図・舞台裏などをうかがうとともに、映像作品の社会的な分析を試みた。

(4)研究成果の概要:沖繩において「文学」は、政治的状況の強い規定力と、文化的・言語的な固有性に影響されながら、「弱い自律性」を特徴とする文化的実践の場を形成している。地域に固有の制度的布置の中で、文学は、この地域の歴史現実を表象する重要な媒体でありつづけている。本研究では、戦後沖繩を代表する何人かの作家たちについて、社会的状況と文学的実践を結ぶ、その多面的な媒介の論理を明らかにすることができたものと思う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計13件)

①鈴木智之 2011 「文学制度の『周辺性』と『脆弱性』ー場の自律性とその地域的条件についての考察」(『社会志林』57(4)、法政大学社会学部学会)

②塩月亮子 2011 「聖地の世界遺産化と沖

繩シャーマニズムー民俗知活用の観点から」、『アジア遊学 特集・シャーマニズムの諸相』、勉誠出版

③武山梅乗 2011 「不穏でユーモラスなアイコンたちー大城立裕における沖繩表象の可能性ー」、『駒澤社会学研究』第43号、駒沢大学文学部社会学科

④松下優一 2011 「『沖繩方言』を書くことをめぐる政治学ー作家・大城立裕の文体論とその社会的文脈』(『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』(70)、慶應義塾大学社会学研究科

⑤鈴木智之 2010 「象られた島の記憶ー崎山多美『シマ籠る』(1990年)における『回帰』の身振りー」、『現代史研究』第6号、東洋英和女学院大学現代史研究所

⑥塩月亮子 2010 「沖繩の洞窟信仰と観光民俗知活用の可能性を探る」、『社会学・社会福祉学研究』、第133号、明治学院大学社会学部

⑦武山梅乗 2010 「沖繩から<普遍>へ大城立裕『戦争と文化』三部作という企て」、『社会学・社会福祉学研究』、第133号、明治学院大学社会学部

⑧松下優一 2010 「『実験方言』再考ー大城立裕の小説『亀甲墓』のテキスト改変をめぐって」、『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』(69)、慶應義塾大学社会学研究科

⑨ヴィクトリア・ヤング 2010 「ディストピア的越境ー崎山多美『ゆらていくゆらていく』における『狭間』」、『琉球・沖繩研究』第3号、早稲田大学琉球沖繩・研究所

⑩与那覇恵子 2009 「琉球弧の重層性を歴史文化・社会・文学の観点から読み直す」、『現代史研究』第5号、東洋英和女学院大学現代史研究所

⑪加藤宏 2009 「映画『アコークロー』沖繩表象の新しい可能性ー沖繩イメー

ジの反転あるいはサヴァービアの暴力」、
『明治学院大学社会学部附属 研究所
年報』第39号、明治学院大学社会学部付
属研究所

⑫鈴木智之 2008 「始まろうとしない「
戦後」の日々を—大城貞俊『G米軍野戦
病院跡辺り』（2008年）における「沖縄
戦の記憶」の現在—」、『社会志林』55(3
)、法政大学社会学部学会

⑬塩月亮子 2008 「信仰と振興のはざま
で—沖縄における洞窟の新たな活用を
めぐって—」、『日本橋学館大学人間社会
専攻記念論集』、日本橋学館大学

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計1件）

①加藤宏・武山梅乗（編）2010 『戦後・小
説・沖縄 文学が語る「島」の現実』、鼎書
房、pp. 4-314

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 智之 (SUZUKI TOMOYUKI)
法政大学・社会学部・教授
研究者番号：80235978

(2) 研究分担者

与那覇 恵子 (YONAHA KEIKO)
東洋英和女学院大学・国際社会学部・教授
研究者番号：00220757
塩月 亮子 (SHIOTSUKI RYOKO)
跡見学園女子大学・マネジメント学部・
教授
研究者番号：90297979

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

松島 浄 (MATSUSHIMA KIYOSHI)
明治学院大学・社会学部・名誉教授
加藤 宏 (KATO HIROSHI)
立正大学・非常勤講師
武山 梅乗 (TAKEYAMA UMENORI)
明治学院大学・非常勤講師
松下 優一 (MATSUSHITA YUICHI)
慶應義塾大学大学院・社会学研究科・博士
課程

ヴィクトリア ヤング (VICTORIA YOUNG)
早稲田大学・オープン教育センター・研究
助手